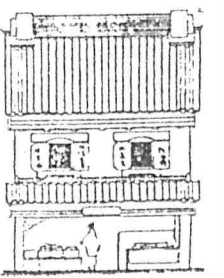


水郷佐原

町並み瓦版



発行 小野川と佐原の町並みを考える会
第二号 佐原町並み保存会
平成七年三月発行

講演会の開催

「震災の教訓を 生かして」

この度、小野川と佐原の町並みを考える会の会員の夏目さんのご好意により講演会を開催いたしますので、ご参加いただければ幸いです。

今回の阪神大震災では、自分の家は大丈夫なのかと不安を感じられました。命あつてこそその町並み保存です。

この講演会は、実際の災害現場で復旧のために活動された夏目さんから、地震に強い建物についてのお話を伺うなど、今後の地震対策に大変参考となるものと思います。

多数の皆様のご参加をお待ちしています。

記

一日 時 三月十八日(土)
午後七時から
二会場 本宿コミュニティホーム

航空旅客会社

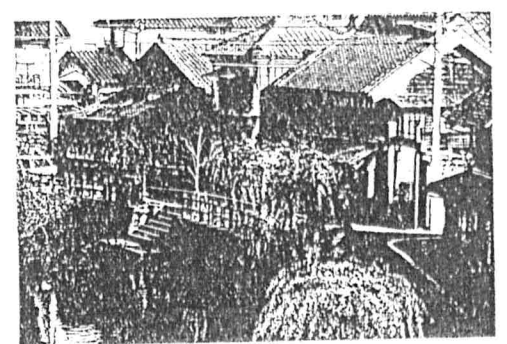
(株)日本エアシステム
機内誌に佐原の町並みが紹介される

この外にも佐原の町並みが数多くの雑誌等に紹介され、全国各地から佐原へ観光客が見えています。

小江戸

伊能忠敬を生んだ町の歴史の香

七重宮蔵 江戸の町並み



「江戸まさりの風情が漂う」

お江戸みたりや

佐原(御座れ)

佐原本町江戸まさり

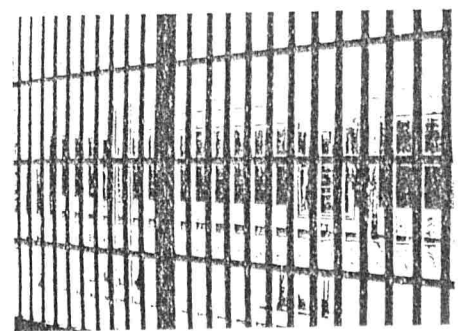
いまは高速道網も四通八達している首都圏である。が、かつて関八州と呼ばれた昔は、米穀諸荷物ほか多くの生活物資は利根川や荒川系などの水路を利用した舟運によった。

その結果、それらの河川に面した集落からは「江戸まさり」の賑いを見せる河港町が生まれた。なかでも江戸から北西へ13里半の川越と東北へ20余里の佐原は当時から、いわゆる「小江戸」として並び称された。

両者にあつては、川越の方がサツマ芋や「時の鐘」で、すでに広く知られている。それにくらべると、佐原(千葉)の方は利根川の向こうの潮来(茨城)とワンセットとなった水郷としては聞こえてくる。が、その「小江戸」としての知名度は、いま一つというのが率直な見方である。

が、訪れてみて、その情趣に富んだ風物には心やわらう。町中を流れる利根川の支流・小野川ぞいの上蔵造りの商家、千本格子の町家、風にそよぐ柳、かつての船着場の名残のダシ(石段)など、すべてが江戸の風情を遺し伝えているのである。

かつての目抜き通りに面して、忠敬橋西詰の正文堂書店の8代目・前



田豊さん(71歳)の話によると、

「江戸末期まで、小野川岸は川口を上ってきた船の人足や旅人、大八車の往来が、昼夜絶えなかつたと。利根川図誌」に書かれています」

前田さんの話の続きは後に回してとりあえず、その小野川ぞいをそぞろ歩きしてみることとした。



忠敬先生が生きている土地

忠敬橋の名からもわかるように佐原は、わが国で最初に正確な日本全国を作成した伊能忠敬(一七四五〜一八一八)を生んだ土地でもある。

忠敬は17歳で佐原の酒造業・伊能家の婿養子となり養家を再興させたほか、名主として困窮者を助け郷土のために尽くした。そんなところから、地元の人びとは今日でも「忠敬先生」と呼んで尊敬している。

橋を渡り右折すると川ぞいに忠敬旧宅(国指定史跡)と、その裏手に記念館がある。忠敬は50歳になると家督を長男に譲って江戸に出た。そして天文学と地理学を学び、やがて日本全国を踏破する測量旅行に旅立つ。そのとき齢なんと55歳である。それから71歳までの間に計9回、距離にして3万5000キロ余、ほぼ地球1周にあたる距離を歩いた。こうして、その死後まもなく一般に「伊能図」と呼ばれる「大日本沿海実測全図」の完成を見るのである。

訪ねてみると、あいにく旧宅は修復工事中(平成7年完成予定)だったが、母屋と記念館の方は見学できる。小沼頼二郎・館長に話を聞くと「入場者数は年々3000人くらいずつ増えて、平成6年度は4万人を超えました。井上ひさしの小説『四千万歩の男』が読まれたせいもありましょう。が、いわば定年後に偉大な業績を残した忠敬先生の生き方が、いまの高齢化社会を生きる人たちの共感を得たと思えますね」

忠敬旧宅の前に橋が架かっているが橋桁からジャージャーと水が流れ落ちていた。これも修復中かなと思つてみると案内板が立っている。

それによると、この橋は江戸初期、佐原村の灌漑用水を東岸から西岸に運ぶために小野川に架けられた樋だった。それを橋としても活用するようになった。それを橋としても活用するようになった。そんなところから名前も樋橋、別名ジャージャー橋と名づけられている、とあつた。町の景観づくりを目ざす佐原市では、その一つとして「小野川ふるさと川づくり事業」を展開している。樋橋の落水運転も親水施設だったのである。

忠敬橋まで戻って、大通りを右折してみる。と、赤煉瓦づくりの2階建て洋館が目についた。大正期の建造物で、三菱館といつて旧三菱銀行佐原支店だったが、現在では市民ギヤラリーとして使われている。

引き返して、つぎに橋を西へ渡る

と、左角に中村屋書店と中村屋乾物店。その向かいに福新呉服店、そばの小堀屋本店。すべて明治25年前後に建てられたもので、どっしりとした土蔵づくりの商家である。無論、いずれも県の重要文化財である。

その手前がさきほど訪ねた正文堂書店である。店主の前田さんは新書判大の1冊の本と、見るからに時代物の大判の本札を用意して私たちが戻ってくるのを待っていてくれた。「これは本店の棟上げのときに書かれた棟札ですが、ご覧ください」

差し出された札面の文字を読むと「神武天皇紀元二千五百四十年明治十三年四月九日上棟」とある。屋根の上の「正文堂書店」という看板は昇り竜の瓦で囲われている。

「この婿にきたのですが、店が家内の祖父が伊能茂左衛門さんって、忠敬さんの本家筋に当たる方からの話でお引き受けして始めた。創業はそれから更に5代さかのぼりますが、はっきりした年代は不明です」

もう一つ、新書判大の冊子は「大正3年発行の『佐原案内』という当時のタウンガイドの複製版だった」

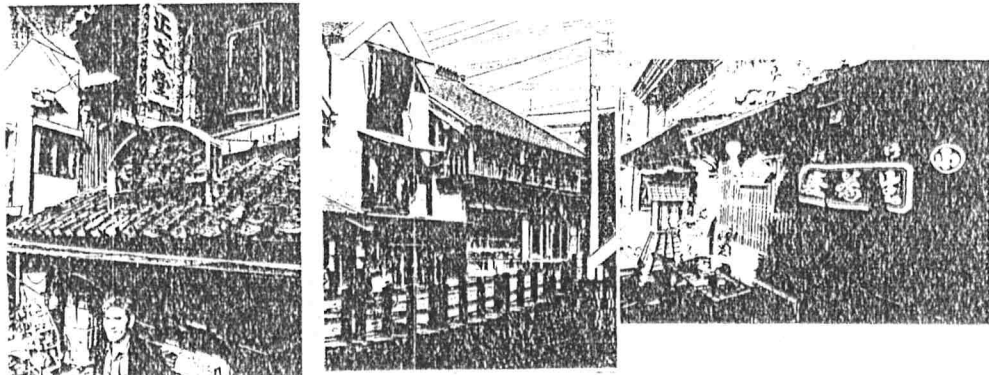
「私は原本を、陶器商・菱屋さん9代目の木内善一氏宅で初めて見て、どうしても復刻したくなり、昭和51年に思い切って出版したんです」

内容を見ると、たとえば「運輸・交通」欄には「水路にあつては定期汽船の日夜運行するあり」とあつて、「東京行 正午十二時、午後八時」とある時刻表も載っている。つまり大正の初めまでは東京に行くのに船便の利用者もいたわけである。

「なにせ、昔は潮来までは下り船が楽に入ってきたって言いますからね、東京までの水路は、まず小野川から利根川へ入る。利根川をさかのぼって関宿（現在の千葉県関宿町）へ。関宿からは合流する江戸川に入つて東京まで下るというルートでした」前田さんは自分も利用したことがあるように、こう真顔で説明した。

町並み保存会の活動も始まる

「この道は、いつかきた道……」という童謡があつたが、佐原という町にはそういった郷愁のようなものを訪れた者に抱かせるところがある。私たちは来る前に「佐原にきたかには香取神宮や水郷にも行かなければ」と話し合っていた。が、もう少し町中を歩いてみることにした。そこでとりあえず車を預けようと、すぐ前にある駐車場に行ってみた。



と、驚いたことに「駐車料金 1回300円」とある。係員に念を押して見たが、1回預けると1日中置いても300円なのである。そればかりか傍らに「町を回る方には貸し自転車あり 無料」と書かれた貼り札まであつた。いかに市営とは言え嬉しくなるサービスではないか。

大通りを西に歩くと、右手に造り酒屋が2軒ある。「東薫」「雪山」という地酒の醸造元であるが、「東薫」の宣伝文が傑作だった。平手造酒も飲んだ」とある。そういわれてみれば、男・平手を客分として迎えた笹川の繁蔵親分の出は、JR成田線で4つ目の笹川だった。

それから横丁を右に左に曲がって見たが、どの小路にも江戸の名残りを漂わせた土蔵づくりや千本格子の家が見られる。なにかのチラシに、江戸文化を生活に持つ佐原」とあるのを見かけたが、まったくそのとおりなのである。

そうする間に、また小野川岸に出た。と、対岸に「正上」と大きく染めぬいた暖簾のかかる店があつた。立ち寄ってみると、水郷で獲れた小魚の佃煮を商う老舗だった。

「店は主人の加瀬順一郎で9代目。醤油醸造元に始まり、いまでは『江戸伝承の味覚』の佃煮も製造販売させていただいております」

とは奥さん美代さんの話である。とくに水郷産のわかさを串焼にした「いかだ焼」は絶品である。

それにしても、これほどの景観をもっと生かせばいいのに、と思いつながら、ソバを食べに入つたのは小堀屋本店。たまたま出前から戻つてきたご主人・篠塚友孝さん（8代目）に、この点を訊いてみると、

「ご覧になったとおり、佐原市内には古い商家や民家が100軒はまだ残っています。が、私たちのんびり屋でしてね。しかし、昨年4月に、やっと『歴史的景観条例』が施行されて、暮れには『佐原町並み保存会』（会長・清宮利右衛門氏）の呼びかけで、初めて説明会も行いました」

その副会長を、篠塚さんは務めているという。なかに慌てることはない。よく考えて俗化しない、文字どおり「江戸文化を生活に持つ佐原」として保存してほしいものである。

はろ〜房総

東京電力千葉支店発行のリーフレット「はろ〜房総」二月号には小野川と佐原の町並みを考える会が紹介されています。

千葉TEPCO 1995/2 No.104

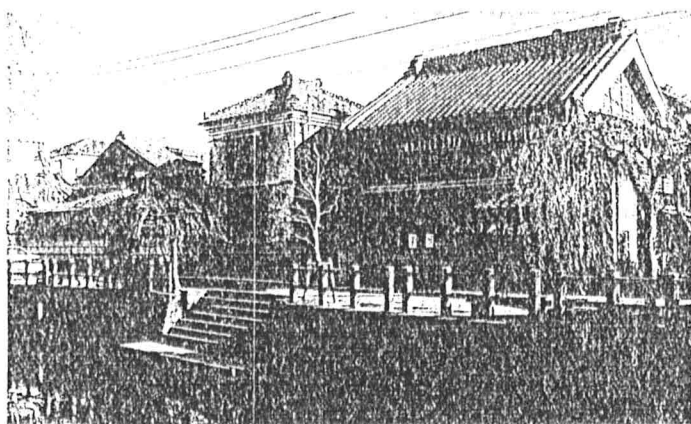
はつらつピープル

小野川と佐原の町並みを考える会 (佐原市)

香取神宮、伊能忠敬で有名な県北部の都市、佐原市。明治25年の火災で1230軒が焼失したものの、その後に建てられた建物は、関東大震災や太平洋戦争の空襲にも遭わず、明治時代の町並みとして現在まで受け継がれてきました。千葉市にある「越デパート」の前身、奈良屋もかつては佐原市にありました。しかし、近代化の波は当然のように、この地にも及び、近年では歴史ある建物が次々と取り壊されていくようになったのです。

そこで平成2年に「小野川と佐原の町並みを考える会」が発足しました。当時は「ふるさと創生」「町おこし」のはじまりでもあったと同時に、市にとっても次なる発展を考える時期でもあったわけで、そのテーマの一つとして行政の助言を受けながら、町並みの保存について考え始めたのです。

大正3年に建てられたレンガ造りの洋館、現在は市の観光案内所となっており年間約3万5千人が訪れる三菱館(旧三菱銀行佐原支店)で、会員の大高さん、堀井さん、菅井さんの三人にお話を



小野川と町並み、正面は県指定有形文化財「正上(江戸時代より醤油を醸造していた店)」

伺いました。「佐原の町は曲がりくねった小野川があるため、高いビルがなく、町並みを保存しやすいんです。貴重な宿場町である一方、今も生活の場であるので、他の土地の人が来ると、本当に明治・大正時代にタイムスリップしたような感覚が味わえます」。

会員は30〜80代と幅広い年齢層で71歳の清宮会長をはじめ45名。「昨年、関東では初めて、文化財保護法に基づく伝統

的建造物保存地区に関する景観条例を市が可決しました。第一目標は達成しましたが、これからは建物の保存に力を入れていきます。そのための保存会も発足させましたし、また、今後は建物の復元も行いたい」と、夢はふくらみます。

県指定の文化財建築8軒と国指定1軒を含む歴史ある建物が並ぶ小野川と香取街道沿い。今後も佐原の町並みを守り続けたいという皆さんでした。

■小野川と佐原の町並みを考える会(会長:清宮利右衛門さん) 〒287 佐原市佐原イ1710 ☎0478(52)2613